

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

佐藤尚平

【所属】(助成決定時)

金沢大学人間社会研究域法学系 (国際学類)

【研究題目】

新出資料「イギリス帝国の遺産作戦」関連文書群の研究：20 世紀中葉のアラビア半島の反英抵抗運動から

【研究の目的】(400 字程度)

20 世紀、ヨーロッパや日本の諸帝国が世界から撤退した時、都合の悪い過去の記録がおそらく大量に処分されただろうということは想像にかたくない。しかし、一体いつ、どれほどの規模で、どのように文書の隠滅工作が行われたのかという点については、まだまだ謎が多い。世界を横断するような調査が難しいということもあるが、そもそも証拠を消すという行為は痕跡を残さないことが多いからだ。

しかし近年、ロンドン郊外で約 60 万ファイルにも及ぶ文書群が見つかった。その多くは、イギリス帝国が 20 世紀中葉に世界各地で処分したはずの行政文書だという。すなわち、今日我々の生きている世界が「忘れたはず」の記憶だ。本研究は、この忘れられた記録を掘り起こす。そしてこの忘却の源泉、かつてイギリス帝国が行政文書を選別し隠滅した「イギリス帝国の遺産作戦 Operation Legacy」(以下「遺産作戦」)の展開を明らかにする。この大きな目的を達成するための端緒として、本研究では、イギリス帝国に対するアラビア半島東部の抵抗運動に注目した。

【研究の内容・方法】(800 字程度)

イギリス帝国に対する中東各地の抵抗運動は、近現代史研究の重要課題である。しかし、20 世紀中葉のアラビア半島東部(特にアラブ首長国連邦)における反英抵抗運動については、研究が極めて少ない。これまで入手出来た一次資料を読む限り、反英抵抗運動についての記録が限定的だからだ。しかし、1950 年代から 1960 年代にかけて中東の各地域で隆盛したアラブ・ナショナリズムが、本当にアラビア半島東部に影響を及ぼさなかったのだろうか。本研究では、この疑問を解決する手がかりを求めて、新たに発見された「遺産作戦」関連文書群を検討するところから作業を開始した。

イギリスの国立公文書館を訪れて新出資料を分析した結果、二つのことが分かった。

まず、近年存在が明らかになった約 60 万ファイルのうち、現在公開されているのは約 2 万ファイルである。この約 2 万ファイルのうち、中東地域に関連すると思われるファイルを調査した限りでは、アラビア半島東部の抵抗運動に関する決定的な情報は含まれていなかった。アラブ首長国連邦の国立公文書館でも調査を行ったが、結果は同じであった。

一方で、公開されている約 2 万ファイルには当初の想定を超える貴重な情報も含まれていることが判明した。それは、この歴史的な文書隠滅工作、実に世界 37 地域で行われた大規模な政策が、どのように決定され、どのように実行されたのかという過程についての記録である。これは、今日我々の生きている世界が「忘れたはず」の記憶がどのように生まれ、そして消されたのかという問題を解決する重要な足がかりであり、イギリス帝国のみならずアジアや世界全体の歴史にとって重要な示唆に富む。この調査結果についてはこれまで少しずつ発表してきており、現在さらに形を整えてまとめているところである。

【結論・考察】(400 字程度)

これまでの調査から見ると、20 世紀中葉のアラビア半島における反英抵抗運動についてはまだまだ謎

が多い。しかし一方で、「遺産作戦」の展開については、当初期待していた以上の成果が上がった。歴史的な文書隠蔽作戦がどのように決定され、どのように実行されたのか。さらに、この「遺産作戦」の遺産、つまりは「忘却」の中で、我々はどのように生きてきたのか。こうした問題については、これからも「遺産作戦」関連文書群の調査を進めながら考えを深めていきたい。単純計算でもまだ 58 万ファイルの未公開資料が存在するので、大きな挑戦となる。

忘却は、歴史認識と表裏一体の関係にある。我々は何を覚えているのか。何を忘れてきたのか。なぜ忘れなければならなかったのか。この忘却という問題、21 世紀の世界・アジア・日本が共通して抱えている問題に対して、この研究が深い示唆を与えてくれることを期待したい。